NPO 法人キャンサーリボンズは、2008 年に発足。
「がん治療と生活」支援を通して、「がんケアの社会化」に取り組む団体です。
2023 年 6 月で、発足 15 周年を迎えました。

がんサバイバー、がんを治療する様々な領域の専門医、精神腫瘍医、産業医などの医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、生活シーンの専門家、企業などが協働しています。

「がん治療と生活をつなぐ」というコンセプトのもと、

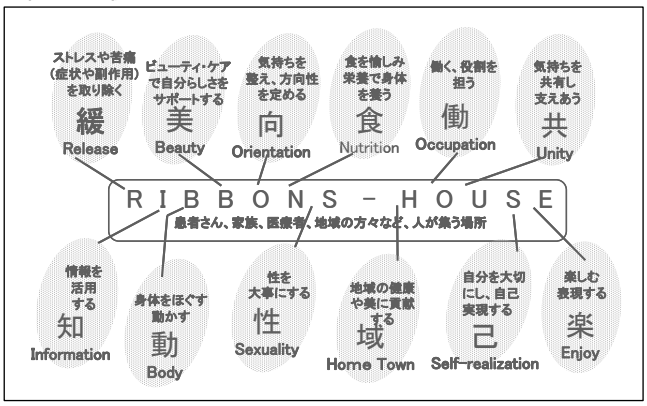
◎がん支えあい啓発活動
（6 月 21 日は「がん支えあい」の日）

◎がん情報とケアを体験する場「リボンズハウス」づくりとネットワーク化

◎がんを体験した人がよりよく暮らし生きることに貢献するテーマ別プロジェクト

を 3 本柱に活動しています。

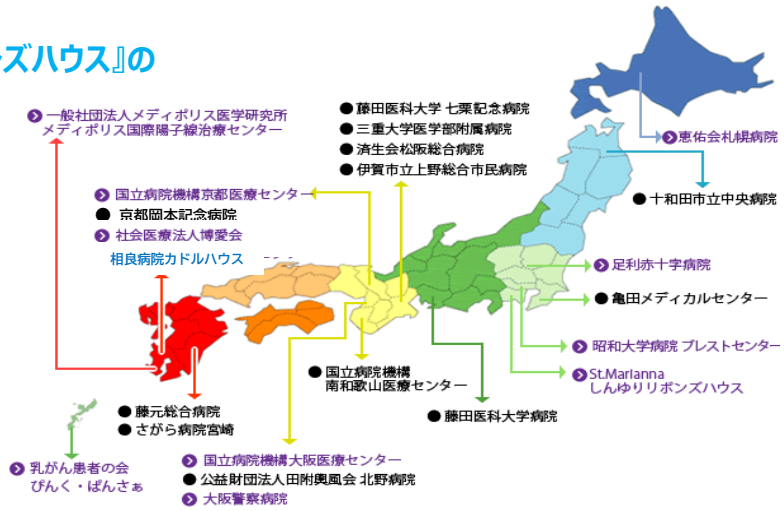
活動の土台を、「こころのケア」「生きる力や価値観の再構築」に置いていることが特徴です。



◆がん情報とケアの体験の場『リボンズハウス』のネットワークは、全国に 23 カ所

リボンズハウスの活動内容は施設によって様々ですが、「ネットワーク会議」を年 1 回開催、情報交流や意見交換の機会としています。

また、「がんの治療と暮らしフェア」（オンライン）の企画推進において、地域を越えた協働が一層進んでいます。



◆「がんケアの社会化」を目指し、医療以外の分野とも積極的につながっています。

2023 年 2 月、全国から福祉分野の専門家や行政担当者、当事者、支援者などが集う「第 26 回アメニティフォーラム」では、『がんの治療を受けながら生きがいをもって生きることのむずかしさ』と題したセッションを行いました。

登壇者：井原和人さん(厚生労働省保険局長)、金森暢子さん(グロー特別養護老人ホームふくら主任看護師)
安藤よし子さん(元厚生労働省人材開発統括官)、岡山慶子さん(NPO 法人キャンサーリボンズ副理事長)

◆がんの治療と暮らしフェア

2014 年から、年 1 回、治療と生活に関する基本的な情報を様々な角度から発信しています。コロナ禍以降はオンライン開催となり、リボンズハウスとも連携して全国から多くの人にご参加いただきました。

2022 年は、

- こころや人生を大切に
- 納得して治療を選択するには
- からだを整えよう
- お金や仕事を考える

のテーマで計 20 セッションを開催、暮らしに役立つ製品やサービスも紹介しました。（オンデマンド配信中）

◆テーマ別のプロジェクトの中から、特徴的な活動をいくつかご紹介します。

【こころ】プロジェクト

キャンサーリボンズが設立当初から大事にしてきたのが、QOLやウェルビーイングの土台となる「こころ」のケアです。

◎レジリエンス支援ツール

朗読 CD『あなたには明日、生きる意味がある』、当事者や家族が気持ちや役割を整理し、今後の人生に向けて価値観を再構築するためのノート形式の冊子『A compass for life with cancer』シリーズなど。(右は当事者向け、24P)

◎グループカウンセリング

NPO 発足と共にスタートした、故丸田俊彦理事（米国メイヨ・クリニックで長くがん患者さんの心のケアに携わってきた腫瘍精神科医）によるグループカウンセリング。がんと共に自分らしく生きる上で価値観を再発見するための、気づきの場であることが特徴。がん治療を受ける人、家族、医療者など多様な参加者の、多様な体験・気持ち・言葉を、瞬間瞬間でファシリテーター(精神腫瘍医や臨床心理士が手法を引き継いでいる)が受け止め、非常に深い交流が生み出されてきた。丸田医師の言葉は、『患者の心を誰がみるのか』で読むことができる。当書籍の一節が、2022 年の茨城県立医療大学の入学試験問題(小論文)の素材として使用された。

◎朗読ワークショップ

病気という共通の体験をした人どうしが、声を出して、同じ本を読む楽しさを体験すると共に、ファシリテーターの道案内で、感じたこと、自身の病気体験、思い、悩みを共有し、傾聴される喜びも感じられる交流の場。

「本を媒介として、自分の内なる世界を見つめ心の土壌を掘り起こし、他の人の土から掘り起こされた言葉を聴くことで、さらに自分を掘り下げる。この内なるダイナミックな体験の共有により、共感の扉が開かれ、“この場で感じた特別のもの”が、“自分自身がここにいる、ここにいていい”という実感につながることを願います。」(朗読家・青木裕子さんの言葉より)

朗読ワークショップの前後で、精神的ストレスが総合的に改善されるという結果を、学会などで発表した。

【いのちの対話・アートとケア】プロジェクト

アートとケアの対話を通じて、いのちのこと、ウェルビーイングにつながる何かについて、多くの人と言葉を共有していきたいと考えています。アートは、いのちの発露であり、生きるとは何か、生きているとはどういうことか、を教えてくれます。アートは、問いであり、自身でも気づいていない自分の内側に連れて行ってくれる乗り物です。

「（病で仰臥している老いた女性の絵と対峙した時）絵の中の人物から問いかけられている、この人に何をしてあげればいいのか、この先にもうひとつストーリーがあると感じた」と話したがん専門医は、全人的医療について語り、「アートは、月並みな説明や普遍的な心理学的解釈を拒否する」という精神科医の言葉の中に、わたしたちは、ケアや医療に求められる構え～自身の価値観を押し付けることなく、一人ひとりに向き合うこと～への示唆を感じ、ある看護師はアートを前にして、「患者の内面に近づこうとしているか、その人のうちに潜み、込み上げようとする力を引き出す準備はあるだろうか」と自分に問いました。

わたしたちは、いのちを語り、感じ合う機会をつくり、発信します。

中村桂子さんによる生命誌絵巻

◎対話的講演会『天に向かって、地に向かって、脱皮する生』

＊昭和大学臨床ゲノム研究所（所長：中村清吾キャンサーリボンズ理事長）開所記念として実施（2022 年 6 月）

対話者：中村桂子さん(生命誌研究者、JT 生命誌研究館名誉館長)
木下　晋さん(鉛筆画家)

◎いのちの対話『“いのちを刻む”鉛筆画家・木下晋の眼差しをめぐって』

＊図書館※総合展アートミュージアム・アンヌアーレ企画として配信(2022 年 12 月～)

対話者：中村清吾さん(昭和大学臨床ゲノム研究所長)
神代　浩さん (前東京国立近代美術館長、アートミュージアム・アンヌアーレ実行委員長)
岡山慶子さん(NPO 法人キャンサーリボンズ「いのちの対話・アートとケア」プロジェクトリーダー)

※キャンサーリボンズでは、2012 年から、医療情報の発信と適切な活用を進めるプロジェクトを公共図書館と連携して実践。図書館でのコーナーづくりやセミナーの開催などに取り組みました。

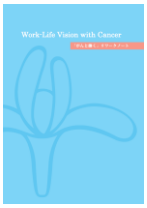
【がんと働く】プロジェクト

NPO 発足と同時にスタートしたプロジェクト。(独)労働者健康福祉機構（現在の(独)労働者健康安全機構）と連携して行った当事者及びがん診療連携拠点病院相談支援センタースタッフへの調査から課題を抽出し、その後の、支援ツールの制作・配布やセミナー活動につなげました。2012 年には、「第 2 期がん対策推進基本計画」に「がん患者の就労を含めた社会的な問題」が組み込まれ、企業や社会における「がん治療と仕事の両立」意識、両立の推進に必要なコンテンツや人的資源へのニーズの高まりを背景に、取組みを拡げてきました。

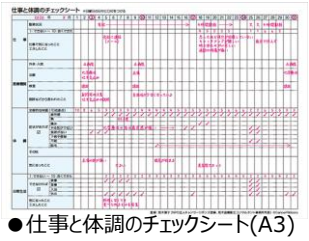
◎『がんと働く』リワークノートシリーズ（セルフマネジメント及び医療者や職場とのコミュニケーションをサポート）

●がんとつきあう(A5×4P)

●自分の状況を確認しましょう(A3)



●リワークノート(A5×40P)


●仕事と体調のチェックシート(A3)

◎『がんの治療と仕事の両立サポーター』養成事業

2017 年より（一社）日本産業カウンセラー協会東京支部と協働し、カウンセリングスキルをベースとした両立サポーターの育成講座を実施。企業単位の管理職向けセミナーも展開。

【キレイの力】プロジェクト

NPO 発足と同時にプロジェクトがスタートした当時、がん医療界における外見ケアへの意識は現在に比べて低く、当事者側には「生命が助かったのだから」と自分を納得させるような傾向も見られました。そんな中医療用ウィッグの贈呈や、治療の副作用で外見が変化した時のメイクアップ法の啓発などに取り組んできました。

◎看護学生によるヘア・ドネーションと、がん治療中の女性に医療用ウィッグを贈る活動

看護学生にヘア・ドネーションに参加してもらうことで、「キレイ」を中心としたQOL 支援への若い世代の感性を養い、将来のよりよい療養環境＆がんとの共生社会づくりを目指す。14 年間で、NPO による説明会に参加し、課題を共有した看護学生は約 9000 名、うちヘア・ドネーションを行った学生は延べ約 900 名、医療用ウィッグを贈った女性は 400 人近くに上る。

日本におけるヘア・ドネーションの草分けのひとつであり、医療界、NPO、複数の企業（ヘアケア製品メーカー、医療用ウィッグメーカー）、看護学校らが協働する、ユニークで先進的な活動としてメディアに数多く取り上げられた。

看護学生から
寄付された髪

初めてのウィッグ贈呈
前列がウィッグをお贈りした皆様
（2009 年）

東日本大震災
被災地の病院
でのウッィグの
フィッティング
（2011 年）

【サンクスナース】プロジェクト

1990 年に『看護の日』が、1992 年には「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が制定されました。そのような背景の中で、当時、医療者個人への直接のお礼を控える文化がではじめたことも相まって、患者・家族の方々からの「何とかお礼の言葉を伝えたい、看護師さんの役に立つことで、恩返しをしたい」との声におされて、「サンクスナース」の活動が始まりました。個人の思いをひとつに集めることによって社会化する、新しい試みでもありました。発起人は故・日野原重明先生はじめ 5 人の委員にお願いをしました。

【おひとり様のがん治療と生活支援】プロジェクト

がん治療の外来化に伴い、地域で暮らしながらがんの療養生活を送る人が増えています。治療に関する意思決定や継続をする上で、家族や周囲からの支援の有無は当事者の QOL や予後にさえ影響すると考えられます。孤独・孤立の問題がクローズアップされていますが、医療現場や地域に何が求められるのか？当事者自身にできることはないのか？NPO といった民間団体の関わり方は？など、まだ十分な取り組みがなされていない当テーマに、課題の抽出から始めています(ピア・サポーター、医療者等への定性調査を実施済。当事者への定量調査を計画中)。

【食事と栄養】プロジェクト

NPO 発足前に、米国のがん専門病院での食事・栄養への取り組みに触れたことが、生活支援への強い動機づけとなりました。15 周年の今年、このテーマに改めて注力します。「何を食べるか」のエビデンスがあるものは尊重しながら、「どう食べるか」「どう食事を楽しむか」「食事をセルフマネジメントしたり役割を担うことで、自己効力感を得ること」などに視点をおいて、医療機関や食の企業とも連携しながら、活動します。

がん治療と生活をつなぐ
NPO 法人キャンサーリボンズ

https://www.ribbonz.jp/

シンボルマークのアイリスの花言葉は「あなたが大切」。アイリスには「虹」という意味もあります。